

大日本婦人会 発行

日本婦人

〈復刻版〉全5巻

1942年11月～1945年1月



昭和十七年一月に結成された
大日本婦人会は、会員数
二千万人を誇る最大の女性組
織であった。女たちは銃後をど
のように担ったのか。

総力戦下の女性動員を
明らかにする貴重な資料！



体裁 B5判・A5判・総1,686頁
解説 小山静子
揃価格 定価80,000円+税
刊行 2011年11月

不二出版

女性に対する国家の視線を問う

一ノ瀬俊也 (埼玉大学教養学部准教授)

このたび大日本婦人会の機関誌『日本婦人』が全巻復刻されることになった。太平洋戦争下の一九四二年に設立された大日本婦人会は前身の国防婦人会とは異なり、もはや熱烈な戦後援活動を行うことはなかった、というイメージが一般的である。事実、同誌の目次をみてもどちらかと言えば教化に関する記事や、防空・貯蓄の奨励といった地味な記事が多く、苛烈な戦争や戦後生活の実態を知るには困難であるように思える。しかし、中身をよく見ていけば、そうした見方は皮相なものに過ぎないことがすぐにわかる。たとえば、「婦人と健民号」と銘打たれた第一巻第九号(一九四三年七月号)の座談会「空襲下の母子」には、妊娠三か月前後が非常に流産しやすい時期であるにもかかわらず、防空演習に駆り出されて流産する者が多い、それは国家のうえからも非常に惜しいので妊産婦手帳が作られた、という趣旨の発言がある。われわれはそういった記事のはしばしから、戦時下の女性が置かれた生活上の立場、さらには彼女らに対する国家の視線の有り様をかいま見ることができるとだ。もちろんこれはあくまでも一例であって、本誌は総力戦下の女性に関心をもつ読者の問題意識に応じた多様な読み方を可能とする好史料である。よって広く推薦したい。

「戦争とジェンダー」という問題を読み解くために

木村涼子 (大阪大学大学院人間科学研究科教授)

「日本人」として、戦争はまだ癒されぬ「傷」であり、解けぬ「謎」である。あのとき、なぜ「わたしたち」はあのような行動をとったのか。わかりやすい答えは「国家」だ。「国家」のせいだ、「わたしたち」は、死に、傷ついた。確かに、人々にとって長く苦しい年月であった十五年戦争は、国家による強力な生活統制と集団組織化によって維持されていた。男性・女性・子ども、それぞれが戦時における役割を担い、その役割に沿って「束ねられた」。「日本婦人」を機関誌とする大日本婦人会は、すべての女性を「軍国の母・軍国の妻」として「束ねた」、戦前最大の女性組織である。男性は戦場へ、女性は戦後の守り。男性はお国のために命を捨てることをもとめられ、女性は夫や息子をお国のために差し出すことをもとめられた。かつては、いづれも国家による無謀な戦争遂行に巻き込まれた「犠牲者」として語られてきた。だが、近年の戦争・ファシズム研究は、「犠牲者」としての民衆という視点にとどまらず、彼／彼女らが戦争やファシズムの積極的な担い手であったことにも注目する。男性たちの多くは軍隊における「立身出世」や「男の誉れ」を夢見たし、女性たちの多くは男性に向かって「男らしく」戦地に赴き「死んでこい」と背中を押した。戦時下のジェンダー秩序は、単なる「男は外、女は内」という役割分担ではなかった。恋人や夫婦間の性愛、母と息子の間の情愛。それらの「生／性」に向かう情緒的昂揚が、死と隣り合わせの戦時においては逆説的に、「大義」のための誇りある自己犠牲に互いを駆り立てる原動力となっていたのではないか。戦時に女性が男性との対比においてどのような役割をもとめられ、実際に果たしていたのか。「戦争とジェンダー」という、近代日本にとどまらない普遍的なテーマを考察するために、「日本婦人」は貴重な史料だといえよう。

「女性の国民化」を体現した翼賛運動雑誌

佐藤卓己 (京都大学大学院教育学研究科准教授)

『日本婦人』、この力強いタイトルを持つ定期刊行物は、管見の限り四種類ある。明治三二年に帝国婦人協会が創刊したものの、大正一〇年に日本婦人新聞社が創刊したもの、昭和九年創刊の大日本国防婦人会機関誌、そして今回復刻された昭和一七年創刊の大日本婦人会機関誌である。昭和一七年二月二日、既存の婦人団体を統合して九段軍人会館で発会式を催した大日本婦人会は、大政翼賛会の傘下団体でも屈指の知名度を誇る巨大組織だった。その役員向けには昭和一七年三月から会報が発行されていたようだが、一般会員向けである本誌の発行はそれから半年以上も遅れている。旧団体相互の競争が激しく、支部長の人選などで対立が表面化したためといわれている。だとすれば、統合のシンボルとなる機関誌タイトルに『日本婦人』が選ばれた事情も単純ではないはずだ。内務省系・愛国婦人会には「愛国婦人」、文部省系・大日本連合婦人会には「家庭」があった中で、陸軍系・大日本国防婦人会の『日本婦人』からタイトルが取られたわけである。ちなみに、下中弥三郎編『翼賛国民運動史』は、大日本婦人会の実践運動をこう批判的に総括している。「真に婦人生活に即する域にまで到達しなかつたのは、人事問題が旧団体均衡主義にこだわったことと、婦人役員の少いことがその主な理由であった。」その均衡主義が雑誌編集にも反映していたかどうかについては精査が必要だが、婦人執筆者の重視は商業的な婦人雑誌と比較しても際だっている。この『日本婦人』の分析により、総力戦下で起こった女性の「戦士化」＝「国民化」運動の実態がより一層解明されることだろう。これまでそのバックナンバーを通覧することが極めて困難だっただけに、雑誌メディア史研究者としても本書の復刻を喜びたい。



主要執筆者名

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 相京伴信 | 杉山得一 | 初山 滋 |
| 鮎貝ひで | 高樹嘉一 | 羽仁説子 |
| 市川房枝 | 高橋白日子 | 林喜代子 |
| 伊藤知剛 | 高群逸枝 | 林 房雄 |
| 氏家寿子 | 竹内茂代 | 平井恒子 |
| 大浜英子 | 土屋文明 | 広橋規子 |
| 奥むめお | 筒井政行 | 深田久弥 |
| 河崎なつ | 壺井 栄 | 帆足みゆき |
| 川西実三 | 鶴見祐輔 | 星野 達 |
| 岸田国土 | 東条英機 | 星野立子 |
| 倉橋 定 | 徳川彰子 | 本庄 繁 |
| 小泉紫郎 | 徳富猪一郎 | 松平俊子 |
| 小泉親彦 | 土佐林テル | 三浦 環 |
| 高良富子 | 土門 拳 | 村岡花子 |
| 小山いと子 | 長島正男 | 山内禎子 |
| 西条八十 | 中西利雄 | 山田わか |
| 佐佐木信綱 | 新居 格 | 山高しげり |
| 寒川光太郎 | 野上豊一郎 | 吉岡弥生 |
| 四賀光子 | 野上弥生子 | 和田和作 |
| 清水登美 | 長谷川町子 | |



関連図書(復刻版)のご案内

女子文壇社刊(一九〇五〜一三年刊行)
女子文壇

全五四巻・別冊一

- 別冊II解説(渡邊澄子)・総目次・索引
- 菊判・上製・総約二五、〇〇〇ページ

●挿定価II本体九万九千円+税
 若い女性たちの自己表現の場を提供した投稿雑誌。文壇への登竜門であると同時にのちに広く社会に影響を与えた女性たちを輩出した。

『女子文壇』執筆名
 記事名データベース

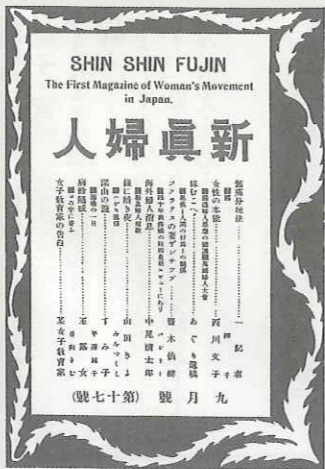
- 監修・解説II金子幸代
- 体裁I DVD1枚+解説ブックレット
- 価格I 本体二万円+税 ISBN978-4-8350-6691-2
- DVDには、小社刊『女子文壇』解説・総目次・索引で割愛されていた、一般投稿者の表現内容や居住地などの詳細データも収録。データ活用者の利便を考慮し、同内容のデータを、保存形式の異なる2種類のファイル(CSVとMicrosoft Excel)提供。

叢書『青鞜』の女たち

- 全二〇巻(総二二冊)
- 函入・総七、七二〇ページ
- 挿定価II本体一五万円+税
- 『青鞜』同人及び『青鞜』周辺の女たちの代表的著作二〇点を選び、復刻。それぞれに解説付き。

西川文字ほかII主宰(一九一三〜一六年刊行)
新真婦人

- 全六巻・付録一・別冊一
- 別冊II解説(岡野幸江)・総目次・索引
- 菊判・上製・総四、一一二ページ
- 挿定価II本体一二万円+税
- 男性中心社会を厳しく糾弾し、女性問題・女性解放を見据えた評論雑誌。大正デモクラシーの息吹を伝える多彩な執筆陣を擁す。



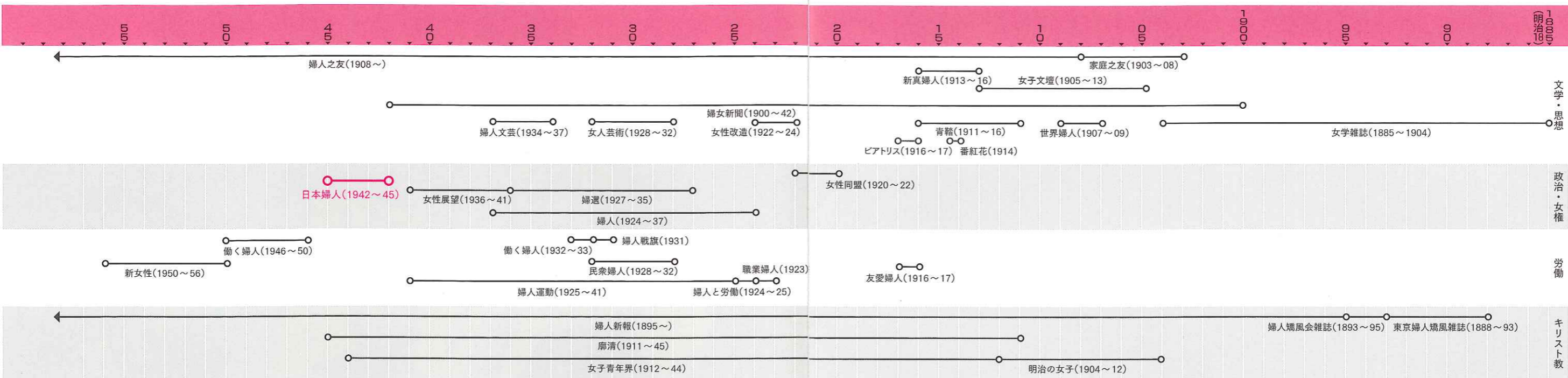
ピアトリス社刊(一九一六〜一七年刊行)

ピアトリス

- 全一卷
- 解説(岩田ななつ)・総目次・索引付き
- 菊判・上製・総六五〇ページ
- 定価II本体一万八千円+税
- 『女子文壇』『青鞜』に連なる、女性に開放された文芸雑誌。平塚らいてう・岡本かの子・吉屋信子などが執筆。



女性雑誌・機関誌の系譜



新女性社刊(一九五〇年〜五六年刊行)
新女性

全二六巻・別冊一(DVD付)

- 別冊II解説(伊藤康子)・総目次・索引+DVD
- A5判・上製・総九、四九六頁
- 挿定価II本体三万七千円+税

敗戦後、『働く婦人』などいくつもの女性雑誌が誕生するなか、啓発的な立場からでなく編集部と読者との緊密な提携によって運動の歴史に新たな一ページが刻まれた。現実を直視した名もなき女性たちによる闘争と活動の記録!

改造社刊(一九三二年〜三四年刊行)
女性改造 戦前編

全二二巻・別冊一

- 別冊II解説(尾形明子・鈴木裕子)・総目次・索引
- A5判・上製・総七、二四二ページ
- 挿定価II本体二万四千円+税

社会主義色の濃い総合雑誌として成功していた『改造』の姉妹誌として刊行され、文学・評論・科学分野での豪華な執筆陣に加え、一九二〇年代のフェミニズムの旗手である女性たちが多数執筆した女性解放雑誌。

奥むめおII主宰(一九二三〜四一年刊行)

婦人運動

全三〇巻・別冊一

- 別冊II解説(鈴木裕子)・総目次・索引
- A5判・B5判・上製・総九、九三八ページ
- 挿定価II本体三〇万円+税

生活者であり労働者である女性の立場に立ち、「婦人消費組合協会」「婦人セツルメント」「働く婦人の家」を設立してきた職業婦人社の機関誌。

全関西婦人連合会刊(一九二四〜三七年刊行)
婦人

全二四巻・別冊一

- 別冊II解説(藤目ゆき)・総目次・索引
- B5判・上製・総九、八六〇ページ
- 挿定価II本体四万八千円+税

西日本で三〇〇万人の会員を擁した戦前期最大規模の女性団体全関西婦人連合会の機関誌。女性差別的な法律の改正・廃娼運動・婦選運動などに積極的に取り組んだ。

婦選獲得同盟II刊(一九二七〜四一年刊行)

婦選

全二九巻・別冊一

- 別冊II解説(松尾尊兎・兒玉勝子)・総目次・索引
- A4判・A5判・B5判・上製・総七、五七二ページ
- 挿定価II本体二万九千五百円+税

婦選運動の中核となって女性の参政権・公民権・結社権の獲得を目指した婦選獲得同盟の機関誌。

神近市子II主宰(一九三四〜三七年刊行)

婦人文芸

全一〇巻・別冊一

- 別冊II解説(黒澤亜里子)・総目次・索引
- 菊判・上製・総六、三二二ページ
- 挿定価II本体一五万円+税

文学雑誌であると同時にフェミニズムをはっきりと意識した本誌は、『女人芸術』後の数少ない女性表現のメディアであった。



日本婦人

復刻版概要



●巻数 全5巻・別冊1
 ●体裁 B5判(第1巻・第2巻)・A5判(第3巻〜第5巻)・総1、686頁

●別冊 解説・総目次・索引

*別冊のみ分売可||本体1,000円+税 ISBN978-4-8350-7077-3

●解説 小山静子(京都大学大学院人間・環境学専攻科教授)

●揃価格 本体80,000円+税 ISBN978-4-8350-7070-4

●刊行 2011年11月

●推薦 一ノ瀬俊也(埼玉大学教養学部准教授)

木村涼子(大阪大学大学院人間科学研究科教授)

佐藤卓己(京都大学大学院教育学研究科准教授)

●原本提供 熊本県立図書館、熊本市立図書館

復刻版巻数	収録原本巻号	原誌発行年月
第1巻	第1巻第1号〜第3号	1942年11月〜43年1月
第2巻	第1巻第4号〜第7号	1943年2月〜5月
第3巻	第1巻巻8号〜第11号	1943年6月〜9月
第4巻	第1巻第12号〜第2巻第4号	1943年10月〜44年3月
第5巻	第2巻第5号〜12号	1944年4月〜45年1月
別冊	解説・総目次・索引	



不二出版

〒113-0023
 東京都文京区向丘1-2-12
 電話03-3812-4433
 ファクシミリ03-3812-4464
 振替00160-2-94084

●表示はすべて税別